

ナフマニデスとバルセロナ討論

— 2016年度前期公開講座「宗教と平和」¹⁾より —

片 山 寛

1. キリスト教と平和

「キリスト教と平和」という主題については、二つの問題があるかと思えます。ひとつは思想の問題として、キリスト教は平和を大事にしているか、という問題です。これについては、私ははっきりと、そうだ、と答えることができます。キリスト教は平和を大事にする宗教です。平和が単に好きだというよりももっと強く、平和こそキリスト教の目的であり、キリスト教の存在意義だ、とさえいうことができます。イエス・キリストは「山上の説教」の中で、「平和を実現する人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる」²⁾と言われました。そして実際、イエスという方は徹底的に暴力や流血を避ける生き方を実践されて、その結果としてご自身が十字架につけられることを甘んじて受けられました。初期のキリスト教徒は、このイエスの生き方になって、「右のほおを打たれたら左のほおを向けよ」³⁾「復讐してはならない」⁴⁾という生き方を実践して、ローマ帝国の迫害の嵐の中で多くの殉教者を出しましたが、暴力的抵抗はしなかったと思われまます。それゆえ非暴力

1) 2016年度西南学院大学前期公開講座は、神学部の担当で5月9日から7月4日まで毎週月曜日の夕方、西南学院コミュニティー・センターのホールで行われた。片山の担当はその第5回、2016年6月6日で、「中世キリスト教における平和」と題して行われた。この論文はその講演に多少の加筆・訂正を加えたものである。

2) マタイ 5, 9。

3) マタイ 5, 39, ルカ 6, 29。

4) マタイ 5, 38-42, ローマ 12, 19。

の平和運動は、まことにキリスト教的な運動であります。世界が平和になること、そのときこそ神の国が地上に来る時だ、そういう信仰がキリスト教にはあります。キリスト教は、イエス・キリストがいつか再びこの地上に来られると信じることから始まりました。主の再臨を待つ、それが信仰の原点です。その日を待つ、その日のために、地上を、主をお迎えするのにふさわしいものにする。平和はそのことに関わっています。

そもそも旧約聖書の『創世記』によれば、神さまは天地万物を6日間でお造りになった後、7日目に休まれたとあります。そこから、キリスト教では一週間というリズムを守っています。6日間働いて、7日目は「安息日」としてお休みになる。で、この「安息」*requies* ということは、やはり「平和」*pax* ということでもあります。平和とは、何もなくてよかったというのではなく、もっと積極的な何かである。平和こそすべてのものの目標である。平和こそすべての被造物の完成である。キリスト教では伝統的にそんなふうを考えてきました⁵⁾。古代末期の神学者アウグスティヌス 354-430 によりますと、天国とは「永遠の平和の国」であります⁶⁾。そしてこの天上の国の平和こそが、地上の私たちの平和の基礎でもある。それは新約聖書によれば、クリスマス晩に、ベツレヘムの野原で羊飼いたちが垣間見た平和の幻でもあります。「いと高きところには、栄光神にあれ、地の上では平和が、御心にかなう人にあるように」⁷⁾。ですから、思想の問題として、キリスト教は「平和」を大事にする宗教だろうか、と問われれば、私は胸を張って、そのとおりだと言うことができます。

それでは、もうひとつの問題として、キリスト教は実際に歴史の中で平和を実現してきた宗教なのか、ということがあります。「平和を実現する人々は、幸いである」⁸⁾とイエス・キリストがおっしゃったのですが、そのことからすると、宗教としてのキリスト教は真に「幸いなる人々」の宗教であった

5) アウグスティヌス『創世記逐語解』4, 16, 27ff.

6) アウグスティヌス『神の国』19巻14章。

7) ルカ2, 14。

8) マタイ5, 9。

か、という問題です。

この問いに関しては、私はさきほどのように胸を張って、そうだ、と答えることができません。キリスト教はその教義の根本において平和を求める宗教ではありますが、常に平和な宗教だったとは歴史的に言えそうもない。キリスト教が平和的な宗教だったと間違いなく言えるのは、紀元1世紀から4世紀初めまでの、いわゆる迫害時代、つまりキリスト教がマイノリティーであった時代だけであって、ローマ帝国で多数派を形成してからは、平和的であった時代も、そうでなかった時代も、両方あるということなのです。支配的な宗教になってからのキリスト教は、平和や和解の原因になったこともありました。国家の暴力に賛成し、そのために祈り、手を貸すということもありました。イエス・キリストを十字架につけて殺した人々と同じことを、まさにそのキリストを信じているつもり私たちの先祖がしてきたのです。そのことに弁解の余地はありません。

私が専門にしている中世のキリスト教に関して言えば、たとえば11世紀の終り、第一回十字軍⁹⁾のおりに偶発的に起った民衆十字軍のユダヤ人虐殺は、教会が直接的にやったことではありませんが、当時のキリスト教に間接的に責任があると思います¹⁰⁾。またそもそも十字軍そのものについても、これはローマ教皇ウルバヌス2世が呼びかけた第一回十字軍(1096年)から第八回(1280年)まで、合計で8回行われたのですが、当時のカトリック教会がどこまでこれらを主導したのかには、諸説ありますけれども、キリストの名において行われた戦争であることは、間違いありません。そしてイスラームの人々からすれば一方的な侵略戦争に他なりません。もしキリスト教が平和を大事にする宗教だ、などと主張するならば、イスラームの人々はあきれて声も出ないということになるでしょう。キリスト教ほど偽善的な宗教はない、言うこととやることがバラバラだ、と言われても仕方ありません。

9) レオン・ポリアコフ『反ユダヤ主義の歴史』第1巻キリストから宮廷ユダヤ人まで』菅野賢治訳筑摩書房 2005年、63頁以下。

10) 同上 65～69頁、ハイム・ヒレル・ベンサソン『ユダヤ民族史』3中世篇 I村岡崇光訳六興出版 1977年、66～69頁、Nachum T. Gidal, Die Juden in Deutschland, Köln 1997, S.34f.

しかしそれとは矛盾するようですが、西欧中世のキリスト教社会というのは、いくつかの例外を除けば、日常的にはおおむね平和な安定した社会であったということもできます。そもそも平和をもたらす宗教であったからこそ、キリスト教はヨーロッパの古代・中世社会に受け入れられて、ヨーロッパの基準的な宗教になったと思われるのです。西ローマ帝国が滅亡してからは、キリスト教がそれにとって代わった、とよく言われますが、そのとおりなのです。pax romana, つまり「ローマの平和」に代わって、「キリストの平和」pax christianaが、中世というこの千年も続いた歴史を支配していたのです。

「ローマの平和」というのは、ローマ帝国の圧倒的な軍事力の支配による平和でありましたが、キリスト教的平和は、キリスト教という普遍的な価値を共有することによる平和でありました。ヨーロッパの各地方は、言葉も違う、民族も違う、歴史も違う。その様々な人々が、キリスト教というものを、つまり聖書という共同の物語¹¹⁾を共有することによって、平和に暮らしていた。それはもう驚きの他はありません。もちろん、利害が対立することがありますから、小さなけんかや小競り合いは何度もあります。しかし同じキリスト教の下にあるということで、人々は破局にまでいたる争いは回避して、暮らすことができたのでした。

このような「キリスト教的平和」、それは同じ時代の東アジアにあった、「儒教的価値の共有による平和」(中華思想を共有した中国、中央アジア、モンゴル、朝鮮半島、日本、東南アジア)と比較しても、すばらしいものでしたが、それにはおのずから限界がありました。ひとつは、このキリスト教という「普遍的な」価値を共有しない人々に対しては、彼らは非常に残酷になり、不当に扱うことになったということです。さきほど、十字軍のことを申しましたが、十字軍の際にユダヤ人に対する虐殺があったこと、そしてイスラームの人々に対してもそれは一方的な侵略戦争であったということが示しているとおおり、キリスト教徒ではない者に対しては、キリスト教的平和 pax

11) 当時の人々にとっては、「物語」というよりも、それこそが「歴史」であり「真理」であった。

christiana が成立しなかったのです。

ユダヤ人やイスラームに対してのみならず、キリスト教内部で「異端」とみなされた人々、カタリ派の異端やヴァルドー派¹²⁾が、厳しい迫害の対象になりました。それは私たちが決して忘れてはならない、キリスト教の歴史上の汚点だと思います。ですから、「キリスト教と平和」という観点から重要なのは、こうしたキリスト教的価値を共有できない人々、異教や異端とされた人々との対話はどうして可能か、それを可能にする条件を考えることだと思います。

それは今日の世界情勢下で、キリスト教やイスラームやヒンズー教といった、価値観の違う人々が平和のためにどう理解しあって対話していくか、という問題へのヒントとなるだろうと思います。

2. 宗教の違いを超えた対話 — バルセロナ討論

さて中世において、異教との敵対的関係を越えて、曲がりなりにも対話が成立したと思われるもの、それが今日ご紹介する「バルセロナ討論」であると思います。これは、1263年の7月20、23、26、27日に行われた、キリスト教とユダヤ教の間の討論であります。

中世を通じて、キリスト教とユダヤ教の間の論争は何度かあった（1240年パリ、1263年バルセロナ、1413/14トルトーサ）のですが、このバルセロナ論争だけが、曲がりなりにも成功した論争でした。そこでは実質的な、中味のある論争ができたと思います。この論文では、どうしてそういうことが可能だったのか、つまり宗教間対話が成立する条件について考えてみたいと思います。それは、現代における宗教間対話のためにも、ヒントになるだろうと思います。

スペインの東部、カタルーニャ地方にバルセロナという町があります。当

12) Pierre Valdo 1140-1218 に始まる清貧と信徒説教を实践した信仰者集団。「リヨンの貧者」とも呼ばれた。2015年6月22日、教皇フランシスコが謝罪。ヴァルドー派は今日では異端ではなくプロテスタント教会のひとつだと認められている。

時そこは、アラゴンのハイメ1世¹³⁾の治世下にありました。バルセロナ討論が成功した第一の理由は、このハイメ1世が強力にイニシアチブをとったことにあります。つまり討論の主催者がキリスト教会ではなかった。討論を計画したのは、ハイメ1世の聴罪司祭だったラモン・ド・ペニャフォー¹⁴⁾だったのですが、ハイメ1世は討論の場にずっと臨席して、議論のなりゆきを管理していました。そして単なる傍観者ではなくて、熱心に耳を傾け、時には討論に参加しました。これに比べれば、1240年のパリ討論はユダヤ教に対する告発状がもとになっており、教皇庁が討論を仕切っていて、ドミニコ会の修道士が、裁判官をしていました。1413年のトルトーサでの討論は、アヴィニョンの対立教皇であったベネディクト13世が仕切っており、最初からユダヤ教徒を弾圧し改宗させる意図のもとに行われたもので、「討論」とは名ばかりの宗教迫害でありました。それらに比べると、1263年のバルセロナでの討論はまだ、かろうじて最低限の公平性が保たれていたと思います。教会が討論を主催すると、自分の信念や信仰がかかってくるために、どうしても宗教が宗教を裁くということになってしまうのではないのでしょうか¹⁵⁾。

第二に重要だったのは、キリスト教とユダヤ教のそれぞれを代表して論戦を戦わせた、言わば代表選手が優れていたということが言えます。キリスト教側を代表したのは、パブロ・クリスティアアーニという人物でした。フランス南部（ラングドック地方）のモンペリエの出身でしたが、特筆すべきことに、彼はユダヤ人でありまして、しかも若い頃にタラスコのエリエゼル・ベン・エマニュエル Rabbi Eliezer ben Emmanuel of Tarascon という有名なユダヤ教のラビの弟子として学んでいたことがあったのです¹⁶⁾。つまり、若い時代に

13) James I, 1208-1276, 征服王 Conquistador 在位1213-76 (アラゴン王, バルセロナ伯, モンペリエ領主), マヨルカ王 1231-76, バレンシア王 1236-76。

14) Raymond de Penyafort 1175/76-1275 ドミニコ会士, 教会法の大家で, ドミニコ会第3代総長。トマス・アクィナスに『対異教大全』を書くように勧めたことでも有名。死後に列聖されている。

15) トルトーサと同時期, 1415年のコンスタンツ公会議では, 神聖ローマ皇帝ジギスムントによって身の安全を約束されていたはずのボヘミアの宗教改革者ヤン・フスが, カトリック教会によって幽閉され, 異端宣告され, その後火刑にされている。

16) Martin H. Jung, Christen und Juden, Die Geschichte ihrer Beziehungen, WBG Darmstadt 2008, S.78.

は彼自身がラビの卵として、ユダヤ教の文書（ヘブライ語聖書、タルムード、ミドラシュなど）を本格的に学んだ経験がありました。その後、彼は上記のラモン・ド・ペニャフォーの説教を聞いてキリスト教に改宗し、ドミニコ会（説教者修道会 *Ordo Praedicatorum*）に入会しました。年の頃ははっきりわかりませんが、タラスコのエリエゼルの弟子だったのが、1229年頃だった¹⁷⁾ことから、バルセロナ討論の時（1263年）にはすでに50代の半ばにはなっていたと思われます。彼はキリスト教への改宗後は、長くプロヴァンス地方で伝道していましたが、バルセロナ討論の後にも継続して、ユダヤ人のキリスト教への改宗を目指して、南フランスですっと伝道を続けました（1274年死去）。つまり、従来のように、ユダヤ教に対して全く無知なキリスト教徒が、一方的にユダヤ教をやり玉にあげて難詰したのではなく、かなりユダヤ教を知った人が、タルムードやミドラシュなどのユダヤ教文書に基づいて、議論を組み立てていたのです。

対話が成立するためには、相手がある程度以上に理解していなければならない。そうでなければ、「対話」とは名ばかりで、実際には自分の尺度で相手を裁くだけに終わってしまう。この点で、バルセロナ討論は、キリスト教側の代表者が、ユダヤ教をある程度以上に理解できる人であった。この点が新しかったと思われます。

一方、ユダヤ教側の代表選手は、この人こそ間違いなく大物で、ラビ・モーゼス・ナフマニデス¹⁸⁾という人でした。彼はマイモニデス 1135-1204と並んで、中世のユダヤ教を代表する大学者で、バルセロナ討論の時には、69歳でした。ナフマニデスはカタルーニャのジローナ *Girona* で生まれ、ユダ

17) Alex J. Navikoff, *The Medieval Culture of Disputation, Pedagogy, Practice, and Performance*, University of Pennsylvania Press, Philadelphia 2013, p.205によれば、パブロ・クリスティアーニ *Friar Paul Christiani* は、タラスコのエリエゼルの他にヴェネツィアのヤコブ・ベン・エリヤ・ラッテスのもとでも学んだ後、1229年頃にキリスト教に改宗した。Navikoffによれば、バルセロナ討論の数年前に、パブロはユダヤ教の高名な学者 *Rabbi Meir ben Simeon of Narbonne* と論争したことがあったらしい。

18) *Rabbi Moses ben Nachmann*, 略してナフマニデス *Nachmanides*, また頭文字をとって *Ramban*, *RaMbaN* という。晩年に設立したエルサレムのランバン・シナゴークは、彼の名を冠している。1194-1270。

ヤ教のラビであり、優れた医師でもあり、ユダヤ教の神秘主義カバラの成立にも影響を与えたとされます¹⁹⁾。バルセロナ討論は形式的には確かに「討論」でありましたが、ここでは二つの宗教が完全に平等に、お互いの立場を表明できたわけではありません。討論の主題そのものが、キリスト教の正しさを証明する意図の下に設定されていました。その不利な条件の中で、ナフマニデスはユダヤ教を弁明して闘い抜いたのです。それには私たちは畏敬の念を覚えざるをえません。

キリスト教の側から言えば、ぜひともナフマニデスを討論に引っ張り出す必要がありました。なぜなら彼らは、この討論を通して、キリスト教の正しさを証明できると思っていたからです。もしナフマニデスのような大学者が、キリスト教は少なくとも間違っていない、これもユダヤ教の見地から見て、ありうる可能性だと認めたならば、フランス南部やスペインに数多くいたユダヤ人（おそらく30万人はいた）が、雪崩を打って自発的にキリスト教に改宗する可能性がありました。ですから、キリスト教側は、アラゴン王ハイメ1世に働きかけて、ナフマニデスに討論に応じるように命令を出してもらったのです。ナフマニデスは命令に応じたのですが、ただ一つだけ条件をつけました。それは、自分の欲するままに完全に自由に語ることができる、という条件でした。めったなことを語ると生命が危ないという下では、まともな議論はできませんから、この条件は当然です。ハイメ1世も承認しました。しかし結果的に見れば、この約束は必ずしも完全には守られませんでした。

3. ドミニコ会側から設定されたテーマ

パブロ・クリスティアーニの側から設定されたテーマは、三つないし四つの主題を持っておりました。

19) ゲルシヨム・ショーレム『カバラとその象徴的表現』小岸昭・岡部仁訳、法制大学出版局 1985年、53頁以下。

1. ユダヤ教徒が待望していたメシアは現れたのだということ
2. 聖書が預言していたメシアは、神であってしかも人であったということ
3. 彼は、人類の救いのために受難し、死んだということ
4. 旧約聖書（ユダヤ教徒の聖書）で述べられた律法的な公的規定は、メシアが来た後は終わったこと（＝ユダヤ教の使命は終わったと認めよ）。

その第一は、メシア（救い主）は現れたのかどうか、という問題でした。

ユダヤ教では、終りの日に神がメシアを地上に遣わしてくださると信じられていて、それはユダヤ人が地上での生活の苦しさの中で将来に向かって希望を持って耐えてゆけるひとつの根拠になっています。タルムードなどのユダヤ教文書も、メシアは必ず来てくださると述べています。しかしユダヤ教では、メシアは来るということは信じていますが、それがあのイエス・キリストという歴史的人物だったとは認めていません。

キリスト教側のパブロ・クリスティアーニは、さすがにユダヤ教をよく知っていて、ユダヤ教とキリスト教が違っている一番中心の点を突いてきたわけです。確かに、この二つの宗教は本当によく似ていて、考え方というか、神学も深いところで一致しています。ただイエス・キリストを認めるかどうかで違うわけです。しかしなにしろイエス・キリストはキリスト教の信仰の中心であり、信仰の対象であるわけですから、問題は簡単ではありません。

討論の第二の主題は、このメシアは神であるか、人であるか、というものです。キリスト教にとっては、イエスは神であると同時に人である、全宇宙の存在の鍵になる方ですが、ユダヤ教にとっては、来るべきメシアは神から遣わされたひとりの人間であり、ユダヤ人をその苦しい境遇から解放してくれる理想の王様です。この点に両者の違いの中心があると見たクリスティアーニは正しい。

第三の主題は主に、イザヤ書53章の苦難の僕しもべがメシアであることを認めるかどうか、という問題でした。メシアは苦しみを受けたのか、という問いです。これまでの三つの主題は、互いに関係しあっており、その全体がキリスト論を形作っています。

第四の主題は、ユダヤ人とキリスト教徒の、どちらが真の信仰を保持しているか、という問いでした。これはナフマニデスにとっては、最も答えにく

い問いでした。なぜなら、もしユダヤ教が正しくて、キリスト教は間違っている、と答えたならば、教会を誹謗・冒瀆した発言として、教会の異端審問にかけられる可能性も排除できなかったからです。この当時、つまり13世紀にはまだスペインの悪名高い王立の異端審問所は開設されていません²⁰。また異端審問はその後の、たとえば近世17世紀を中心とした魔女裁判のように、過酷な、拷問を伴う恐ろしいものではありませんでしたが、それでもそれは恐怖だったはずです。また、ナフマニデス以外のバルセロナ在住のユダヤ人にとっても、それは恐怖でした。討論のなりゆき次第によっては、彼らも迫害されるかもしれなかったからです。

当時、ユダヤ教徒は、ヨーロッパのキリスト教世界において、潜在的キリスト教徒として、つまりまだキリスト教を信じてはいないけれども、将来は信じるようになるはずの人々として、存在を許されていました。特にスペインは、イスラーム教徒もたくさんいたので、ユダヤ教徒はキリスト教とイスラーム教の間に位置して、両者をつないで経済活動をするものとして、貴重な存在だった面があります。そうやって存在を許されておりましたが、いつ何どきそれがひっくりかえって、ユダヤ教迫害が始まるかわからない。そういう状況の中に、バルセロナ討論はあったわけです。

しかし幸いながら、討論は第1と第2と第3の主題だけで時間切れになりましたので、第4の主題が論じられることはありませんでした。

4. 討論の経過

(1) メシアはすでに来たか

パブロ・クリスティアーニは、タルムード（ユダヤ教の口伝律法）にもとづいて、ファリサイ派の人々が、メシアの到来を信じていたことを論証しまし

20) カトリック両王（カスティーリヤのイサベル1世とアラゴンのフェルナンド2世）がローマ教皇シクストゥス4世から異端審問所設立認可を受けてセビーリヤに開設したのは1480年、ドミニコ会士トマス・デ・トルケマダ（彼もまたユダヤ教からの改宗者コンベルソだった）が初代異端審問長官に就任するのが1483年である。関哲行『スペインのユダヤ人』山川出版社2003年、62頁参照。

た。そしてこれこそがイエス・キリストである、つまりタルムードを（口伝で）伝えたユダヤ教の指導者たちは、イエスがメシアであると信じていたのである、と結論しました。

これに対してナフマニデスは、次のように答えています。

「ナザレ人〔イエス〕の〔十字架の〕事件が第二神殿の時代に起きたことは知られていないのだろうか。彼は神殿崩壊〔紀元70年〕以前に生まれ、そして殺されたのだ。他方、タルムードの伝承を伝えた賢者たち、ラビ・アキバ〔Rabbi Akiba 紀元50-135頃〕と仲間たちは、神殿崩壊の後に来たのだ。ミシュナーを編集したラビ〔Jodah ha-Nasi 2世紀後半-3世紀〕や、ラビ・ナタン〔Nathan ha-Bavli 2-3世紀〕は神殿崩壊よりはるかに後に生きた人だ。タルムードを編集したラヴ・アシ〔Rav Ashi 335頃-427/8〕に至っては、神殿崩壊の400年も後に生きた人だ。もしこれらの賢者たちが、ナザレ人は特別な人〔メシア〕であって、彼の信仰と宗教は真であると信じていたのなら、そしてもし彼らが、パプロ修道士〔クリスティアーニ〕が証明を意図している根拠になっているこれらの文書を書いたのだとしたら、どうして彼らはユダヤ教の信仰の中にとどまり、以前の習俗の中にとどまったのだろうか。彼らはユダヤ人であり、一生涯ユダヤ教の中にあり、ユダヤ人として死んだのだ——彼らも、彼らの子どもたちも、彼らの教えを聞いた学生たちも。どうして彼らは、パプロ修道士のようにナザレ人の信仰に回心しなかったのだろうか。もしこれらの賢者が、ナザレ人を信じ、ナザレ人の信仰を信じていたのなら、どうして彼らは、彼らの教えを彼ら自身よりも理解しているらしいパプロ修道士のようにならなかったのだろうか」²¹⁾。

ナフマニデスによれば、預言者たちは、メシアが来たときには世界が平和になり、正義が支配するようになると預言しました。しかし、イエスが来てからも、世界はいまだに暴力と不正で満ちています。それはメシアの到来を疑わせるものです。むしろすべての宗教の中で（彼の念頭には、イスラームとキ

21) Ramban (Nachmanides), *The Disputation at Barcelona*, Translated and Annotated by Rabbi Dr. Charles B. Chavel, Shilo Publishing House, New York 1983, pp.4-5. これはナフマニデスがヘブライ語で書いた報告 *Vikuah* の英訳である。

リスト教があったと思われます), クリスマンたちは最も争いを好むのではないか、と彼は問いました²²⁾。これは大胆な発言でした。ナフマニデスは、「自由に語ってよい」という約束は国王からもらっていましたが、それでも場合によっては死を覚悟していたはずです。

(2) メシアは神か人間か

バブロ・クリスティアーンは、ラビたちの聖書釈義(ミドラシュ)を引いて、古代のラビたちが、メシアはただの人ではなく神的存在だと考えていたことを論証しました。

ナフマニデスはこれに対して、ミドラシュは聖書やタルムードほど不動の権威ではなく、読者が取捨選択可能なものと反論しました²³⁾。ラビたちの一人が「メシアは神殿崩壊時に生まれた」と述べたからといって、ユダヤ教徒すべてがそれを信じなければならないわけではないのです。こういう発言は、ナフマニデスが一流のラビだからこそ言えることだったと思います。

聖書の預言者たちは、メシアを肉も血もある人間だと見なしていた、とナフマニデスは言います。メシアが神だ、というのは、ユダヤ教にとっては、到底受け入れがたい主張だということです。

「ユダヤ人、あるいは他の信仰の者は誰も、信じることができないのだ。すなわち、天地の創造者が一人のユダヤ人女性の胎に宿り、そこで7カ月間成長し、幼児として生まれ、後に成長し、裏切られて敵の手に落ち、彼らは彼に死刑を宣告して処刑したということ、そしてその後……再び生きて〔復活して〕元来の場所に戻った、ということである」²⁴⁾。「もしあなたが、生まれてからずっと祭司の説教を聞いてきて、彼があなたの脳や骨の髄をこれらの教えで満たしてきたのなら、その教えはあなたの中で、慣れっこになった習慣のゆえに定着するだろう。しかし大人になってはじめてこれらを聞いたなら、あなたはそれらを受容することは決してあるまい」²⁵⁾。

22) Ramban, op. cit. p.20-21.

23) cf. Ramban, op. cit. p.15.

24) Ramban, op. cit. p.19.

25) ibid.

(3) メシアは受難したか

イザヤ書52章13-14節に、「見よ、私の僕^{しもべ}は栄える。はるかに高く上げられ、あがめられる。かつて多くの人をおのかせたあなたの姿のように彼の姿は損なわれ、人とは見えず」という言葉があります。イザヤ書53章の有名な「苦難の僕」に続いてゆく導入の部分です。キリスト教側は²⁶⁾、この箇所こそメシアの苦難を表しているのだ、と主張しました。

ナフマニデスの答え。「真実の意味においては、この言葉はただ単に一般的にイスラエルの民のことを言っているに過ぎない。というのは、預言者たちは常々、『わが僕イスラエル』²⁷⁾『おお、わが僕ヤコブよ』²⁸⁾と呼んでいるからだ」。

パプロ修道士。「あなた方の賢者自身が、これはメシアのことだと言っているのだ」。

ナフマニデス。「ハガダー（物語）の書の中で、われわれの幸いなるラビたちがこの箇所をメシアと関係づけて語っているのは確かだ。しかし彼らは決して、彼（苦難の僕）がその敵たちによって殺害されたとは述べていない。ユダヤ教の伝統のいかなる書においても——タルムードであれ、ハガダーであれ——ダビデの子なるメシアが殺されたとか、敵どもの手に落ちたとか、悪人たちとともに葬られたなどと述べているものはないのだ」²⁹⁾。

議論の流れは、ここまでナフマニデスに優勢に流れていたように思われます。しかしここでストップの声がかかります。それは意外なことに、バルセロナのユダヤ人市民からの声でした³⁰⁾。彼らは、ユダヤ教側がキリスト教ドミニコ会を論破する形になることを恐れたのです。ドミニコ会は、バルセロナ討論よりも30年ほど前から、カトリック教会の異端審問所の責任をあずか

26) Ramban, op. cit. の註解者 (Rabbi Dr. C. B. Chavel) によると、これは国王の判事の一人、Master Guillem の発言であった。

27) イザヤ書 41 章 8 節。

28) イザヤ書 44 章 1 節。

29) Ramban, op. cit. p.12-13.

30) cf. Ramban, op. cit. p.31.

るようになっていました。この頃の「異端審問」というのは、後世の魔女裁判のように無茶苦茶な恐ろしいものではなかったのですが、それでも、ドミニコ会を刺激したくないという雰囲気はあったように思われます。彼らはナフマニデスを説得して、これ以上の討論を辞退してくれるように依頼しました。

この声を聞き入れて、ナフマニデスはアラゴン王ハイメ1世に、できたらここで討論を打ち切りたいと申し出ます。けれども、王はそれを聞き入れませんでした。せっかく話が面白くなってきたところだったから、というのがひとつの理由でしょうが、ハイメ1世にはおそらく、こちらでひとつドミニコ会の勢いを削いでおきたいという、政治的理由もあったように思われます。

こうして討論は最後の日も続行されました。ナフマニデスの書いた記録を読むかぎり、討論そのものは彼の完勝だったと思われます。すなわち、旧約聖書やタルムード、ミドラシュからは、ナザレ人イエスがメシアであるという証明はできませんでした。ハイメ王はナフマニデスに、次のように述べて賞賛したといます。「わたしはいまだかつて、正しくないことをこのように見事に論じた人間を見たことがない」³¹⁾と。ハイメ王は、当然クリスチャンですから、ナフマニデスの議論を承認したわけではありません。ですから「正しくない」と言いました。しかしナフマニデスの議論は見事であった。それを王が賞賛したのです。

討論の8日後（8月4日）の土曜日、これはユダヤ教の安息日でありましたが、ハイメ1世は、バルセロナのユダヤ教シナゴグを訪問しました。そしてもう一度上機嫌で、イエス・キリストこそ救い主だと言いました。しかしそれをシナゴグにいたユダヤ人たちに強制したわけではありません。そしてナフマニデスに記念の褒美として、金貨300枚を与えました³²⁾。

31) Ramban, op. cit. p.40.

32) Ramban, op. cit. p.42.

5. バルセロナ討論が成功した理由

すでに述べたように、バルセロナ討論（1263年）が成功した第一の理由は、そこにハイメ1世 1208-76というレフェリーがいたことだと思います。彼自身がクリスチャンでしたが、キリスト教会を代表していたわけではありませんでした。そのためにこのレフェリーの前で、ユダヤ教とキリスト教はいわば対等な立場で論争をすることができたのでした。ハイメ1世は、その長い治世（1213-76年）の間に、イスラーム勢力が支配していたマヨルカ島を征服し（1229年）、バレンシア地方を併合する（1238年）などの業績を挙げ、征服王 *Conquistador* と呼ばれた人です。この実力ある君主が関心をもって主催した討論だったことが、討論を成功させました。

第二に、この討論は密室で行われた裁判のようなものではありませんでした。そこには相当数のハイメ1世の宮廷人や、バルセロナの市民たちがいました。教会人だけではなかったのです。何人ぐらいが参加したのか、はっきりはわかりませんが、パブロの側のドミニコ会士が書いたラテン語の報告によると、「多くの貴族、高位聖職者、修道士、騎士たち」が集まっていたといえます。またナフマニデスは、「すべてのユダヤ人の中でもとりわけ熟達していると思われる多くの他のユダヤ人」に伴われていた、とも書かれています³³⁾。ナフマニデスの書いた報告（英訳）によると、*many from the jewish community*³⁴⁾とあります。ユダヤ人の市民も大勢参加していたのです。曲がりなりにも、それは市民に開かれた討論でした。今日でも、討論が成立するためには、それが公開の討論である必要があると思います。

第三と第四に、討論の中心になった両方の代表選手、とりわけユダヤ教側のナフマニデスが優れていました。彼はほんとうに信じられないほど勇敢であったと思います。王様は安全を保証してくれましたが、権力者のこの種の安全保障が、後々の安全までも保証するものではないことは、ナフマニデスもよく知っていたはずです。明らかに彼は、命がけでユダヤ教の信仰を守り

33) cf. Navikoff, op. cit. p.206.

34) Ramban, op. cit. p.31 ; Navikoff, ibid.

抜く決心をしていたものと思われます。実際、彼はこの討論のあと、身の危険を感じるがあったのでしょうか。4年後の1267年に、(パレスチナの)エルサレムに転居しています。そしてその生涯の最後の3年間をエルサレムで過ごし、彼を尊敬する友人たちの協力を得て、エルサレムの旧市街に **Ramban Synagogue** というユダヤ教の会堂を設立しました。

第五に、ナフマニデスはあらかじめ、自分は自由に語りたいと宣言をしていました³⁵⁾。討論の中では、場合によってキリスト教を批判することになることも避けられないかもしれません。そして実際、討論から約1年後に、ドミニコ会は、ナフマニデスが討論の中で、イエス・キリストのことを悪しざまに言ったので罰するべきだ、という訴えを起こしています。ハイメ王はそれを認めて、ナフマニデスに罰金を支払うように命じていますが、同時に、その罰金の三分の二を免除しています³⁶⁾。

第六に、これは外的状況なのですが、このバルセロナ討論が対等の討論として成立したのは、バルセロナ市を始めとして、カタルーニャ地方に住んでいたユダヤ人共同体の経済的実力が、当時はまだかなりあったからだ、ということが出来ます。当時のユダヤ人人口がどのくらいあったのか、はっきりは分かりませんが、後のイベリア半島の歴史を見ても、おそらく10万人を超えるユダヤ教徒がアラゴン王国に住んでいました。そのことの例証として、ナフマニデスには実は兄弟がいて、この兄弟、ベンベニステ・デ・ポルタはバルセロナ市の重要な役人をしていて、ハイメ1世のために税金を集める役所の責任者だったようなのです³⁷⁾。そして彼は、ユダヤ人共同体を代表して、相当額の金をハイメ王のために用立てていることが判明しています。ですから、当時のユダヤ人共同体の実力が、討論に現れているという見方も成立するかと思います。ユダヤ人共同体は、ハイメ王から見て、無視できない勢力を保持していたのです。当時は、イベリア半島にはまだ多くのイスラーム教徒が住んでいましたから、ユダヤ教を弾圧したならば、下手するとイスラーム教徒まで敵にしかねない、という事情もあったはず³⁸⁾です。

35) Ramban, op. cit. p.4.

36) 13th-Century Rabbis, Books LLC, Wiki Series, Memphis 2011, p.31.

37) *ibid.* p.28. Benveniste de Porta ?-1268 の事績については、手元に他の資料がなかったため、Wikipedia (英文) の記事を参照した。

第七に、これも外的状況なのですが、私にとっては非常に大切なことがあります。それは、1263年というこの時期が、中世の大学において「スコラ哲学」が最も栄えた時代だったということです。トマス・アクィナス 1225-1274、ボナヴェントゥーラ 1221-1274 などの名前で有名な「スコラ哲学」は、まさにこの「バルセロナ討論」と同じ時代に、パリ大学やイタリアの大学で展開されておりました。そして「討論」*disputatio* という方法は、このスコラ哲学の方法であったわけです。バルセロナでなされたことは、典型的なスコラの討論の方法と同じではありませんが、おおぜいの人々が参加して共同で真理を探究してゆくという点で、共通点もあります。私は、まさにこの13世紀に始まった「大学」とそこでの学問の方法が、バルセロナ討論を実り多いものにした原因のひとつではないかと考えています。

バルセロナ討論は、西欧中世という、キリスト教が支配的であった時代の、非常に珍しい充実した宗教対話でした。後にも先にも、このような宗教間対話は実現していません³⁹⁾。たとえばこれより150年後のトルトーサでのユダヤ教・キリスト教の討論(1413年)は、露骨にユダヤ教徒をキリスト教に改宗させようという目的の下に行われたもので、恐怖と強制の空気の中で、ユダヤ教側はまともな議論をすることができませんでした。実際にこの時期、スペインに住んでいたユダヤ教徒の三分の一がキリスト教に改宗したと言われてます⁴⁰⁾。

バルセロナ討論においては、ナフマニデスは互角以上の闘いをしました。そしてそれは現代でも、ユダヤ教とキリスト教のどこが共通でどこが違うかを考える上で、参考になる、ある意味で模範的な解答を提供しているのです。

38) イスラーム教徒の最後の牙城グラナダが陥落して、イベリア半島のレコンキスタが完成するのが1492年、同年にカトリック両王からユダヤ人追放令が出て、ユダヤ人は改宗か退去かの2者択一を迫られた。このときイスラーム教徒にはグラナダ条約により信教の自由が認められたが、1501年以降は、この約束は次々に反故にされていった。

39) Novikoff, *ibid.* p.208 によれば、1269年頃にも、パリでドミニコ会が主催してバルセロナと同じ主題を掲げて討論が行われたらしい。このときはラモン・ド・ベニャフォーの指導下にあったドミニコ会の聖カタリナ修道院が会場であった。ここでもパプロ・クリスティアーニが討論を主導したらしいが、詳細は伝わっていない。

40) 関哲行『スペインのユダヤ人』山川出版社2003年、57頁。